

シンポジウム実施報告書
「ビルマ(ミャンマー)の「民族団結神話」を超えて」

Beyond the Myth of 'Solidarity of the National Races' in Burma (Myanmar)

【日時】 2018年1月20日(土) 13:00-17:45

【場所】 上智大学四谷キャンパス 中央図書館9階 L-911

【プログラム】

開会の辞・趣旨説明 13:00-13:15

第1部 海外招聘者による基調講演 13:15-14:15

Dr. Nick Cheesman (Australian National University)

'How 'National Races' Came to Surpass Citizenship in Myanmar: The Preeminence of the Idea of National Races in Myanmar Politics'

第2部

第一報告 14:20-14:45

菊池泰平 「パンロン会議再考—ビルマ独立交渉期におけるシャン政治の展開(1945年半ば~1947年2月)—」

第二報告 14:45-15:10

藤村瞳 Baptist Karens' Quest for the Official Status of British Burma and Their Intent in the 1880s

第三報告 15:10-15:35

和田理寛 Formation of Mon Sangha Orders in Myanmar after the 1980s

第四報告 15:35-16:00

Noemi-Tiina Dupertuis

Traces of Ethnic Nationalism at the Local Level: the Case of Chin in Kanpetlet

第3部

コメンテーター (Cheesman氏、高谷紀夫先生・今村真央先生)からのコメント・全体討論 16:15-17:40

閉会の辞 17:40-17:45

本シンポジウムは、多民族国家ビルマ(ミャンマー)における「民族大同団結」という言説と、それを支える歴史認識を批判的かつ実証的に再考することを目的として開催された。ビルマには、135の公定民族とこれを大別した8大土着民族という分類がある。独立以来、政府は連邦制を基本枠組みに、これら「土着民族の団結」に基づく国民像を追求してきた。これによれば、ビルマの土着民族は元来親和的に暮らしていたが、英植民地統治によって分裂が生じ、その後、独立前夜のパンロン会議を機に諸民族は再び結束を強めてきたということになる。

だが、この歴史認識は、国家や国軍が自国統治の正統性原理の一環として用いてきたものである。一方、英領期以降に生じた少数民族主体の運動すべてが、この公定言説に収斂するわけではない。国家が誘導する「諸民族団結」の論理とは異なる、統合の模索や社会動態もあるのではないか。

上記の問題意識に基づき、本シンポジウムではオーストラリア国立大学よりビルマ法政治学者 Nick Cheesman 氏をお招きし、まずビルマの法制度のなかで「土着民族」という概念と定義がいかに揺動してきたのかを講演いただいた。そのうえで、法制度上での定義とは異なる恣意的に同概念が行使されていくなかで、「土着民族」という概念がビルマの政治パラダイムとして台頭する過程が明示された。

Cheesman 氏の講演内容につづき、本シンポジウムでは 4 本の研究報告が行われた。まず、菊池報告では、土着民族の団結という「神話」の実相に迫るため、パンロン会議の元来の主催者であったシャン・ソープワたちの政治意図に焦点が絞られた。次に、藤村報告では、19 世紀末におけるキリスト教徒カレンたちによる「新英的」な活動の政治意図が検討され、「親英的なカレン（と反英的な土着民族バマー）」という一面的な通説的歴史認識の危うさが示された。続く和田報告では、仏教のビルマ化に対抗し民族運動をすすめてきたモン僧伽の事例が取り上げられた。多数派民族バマーと同じ上座仏教を奉じるモンは、仏教徒バマーとの同化が著しいといわれる一方で、その「バマー化」という現状に呼応するかたちで宗教エリートがモン意識を高めつつある動態が明らかになった。最後に、ノエミ報告はチン州南部の農村におけるフィールドワークの成果に基づき、住民の統合が難しい状況における、国民や民族単位による統合理念に対する人々の認識の諸相が例示された。

上記の四報告に関連し、コメンテーターの高谷紀夫先生からは民族団結神話の舞台となった場所、パンロンをめぐる歴史認識や叙述の変遷に関して捕捉説明をいただいた。今村真央先生からは、四つの報告にひとつの筋道を示すことが課題として挙げられ、ビルマの言語的マイノリティを描写する際、「民族」以外の分析視角が重要になるという指摘があった。その一つの可能性として、「居住域」という生態的環境から捉えなおす視座が提案され、その有用性が説明された。このコメントとの関連のなかで、Cheesman 氏からは、さらに四つの事例に通底する特徴的な動態として、「(政治的) 認知の模索 (struggle for recognition)」が挙げられると指摘があった。すなわち、国家や多数派といった政治的権力が存在する社会のなかでいかなる姿勢でどのように対峙していくのかという意味で、認知されることを目指した様々な様態が各事例で示されていると解説が加えられた。その様態の多様さに目を向けることで、「民族」という表象が政治的交渉のなかでいかに表出するのかという客観視点から議論が可能となるというアドバイスがあった。その他、Cheesman 氏からは個別報告に対する詳細なコメントと指摘もなされた。

本シンポジウムの成果は大別して二つある。まず、ビルマの少数民族言語を駆使した事例研究を軸に、こうした学術イベントが企画できたことそのものが成果であるといえる。ビルマ研究学界では、依然として少数民族言語を用いた研究成果の蓄積は低調である。今回のよ

うな内容で企画・実施が敢行され、ビルマ研究者の先生方と議論を交わすことができたことで、ビルマ研究の進展にいくばくかは寄与できたのではないかと考える。

二つ目の成果は、新進気鋭のビルマ研究者 Cheesman 氏を招聘したことで、深い洞察に基づいたコメントをいただき生産的な議論ができたということである。特に、同氏から提起された「認知の模索」という分析指標によって、「民族」という枠組みに縛られずに事象の動態を見極めるための一つの方向性が明示されたといえる。こうした分析視角から、各報告者の事例分析の深化が望まれる。

一方で、シンポジウム実施をつうじてみえた課題も多かった。単なる個別事例の研究報告の寄せ集めではない、全体で一つの軸を持つ問題設定の在り方への指摘が多かったように思う。少数派の視点から論じなおすことで、新たにみえてくるビルマ史あるいはビルマ社会像とは何なのか、説得的な仮説提示を行うことができなかつた。これらは今後の課題とし、今回得たコメントや指摘を基に、更なる研究の深化に努めていきたい。